

「札幌オリンピック」の遺産が伝える近代都市への歩み

—オリンピックによって新たにデザインされたまち・札幌

■ 概要

1972年、札幌市はアジア初の冬季オリンピック開催地となりました。その背景には、明治から昭和にかけて、スキーやスケートがウインタースポーツとして市民に定着していった歴史があります。

オリンピックの開催は、札幌のまちが変わるきっかけとなり、インフラが整備されるなど近代都市としての^{きばん}基盤がつくられました。また、競技施設の建設やロゴマークのデザインなどに一流のクリエイターが携わり、現在まで残されているものも少なくありません。

それらオリンピックの遺産（レガシー）をたどることで、今につながる札幌のまちの魅力が見えてくるはずです。

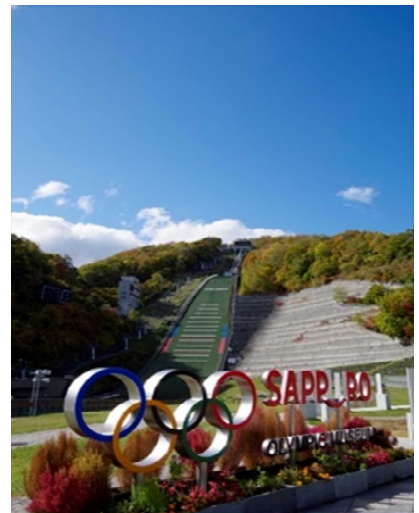
■ ストーリー

アジア初の冬季オリンピックとして1972（昭和47）年2月3日～13日まで開催された「第11回冬季オリンピック札幌大会」。しかし、本当はもっと早く実現するはずでした。1940（昭和15）年、第5回大会の札幌開催が決まっていたが、日中戦争の激化により政府は開催権を返上。幻の冬季オリンピックとなってしまったのです。再度の招致は日本、そして札幌にとってまさに悲願でした。第10回開催は逃したものの、第11回は、IOC委員・高石真五郎^{たかいししんごろう}が病床で札幌開催を切々と訴えた「高石アピール」が決め手となり、一次投票で過半数を獲得し札幌に決定。招致にかける熱意が実を結びました。

札幌のウインタースポーツの歴史は、明治時代に始まります。スケートの伝来は早く、1877年（明治10年）に札幌農学校（現在の北海道大学）に着任したアメリカ人教師のウィリアム・ブルックスがスケート靴を持参して学生の前で滑ったのが、日本で初めてとされています。その後、新渡戸稲造^{に と べい ならう}がアメリカ留学から帰国した際に、札幌農学校にスケート靴を持ち帰ったことで市民の間で人気が高まっていきました。1926年（大正15年）には「氷上フェスティバル in 中島公園」というスケートと氷に感謝するイベントが行われ、市民は仮装をして夜遅くまでスケートを楽しんだそうです。

スキーは、明治41年（1908年）、前年に札幌農学校から改称した東北帝国大学農科大学（現在の北海道大学）でスイス人教師ハンス・コラーが持ち込んだアルペンスキーが、学生のあいだで広まりました。1932（昭和7）年には、初の国際規格のジャンプ競技施設「大倉シャンツェ」が開場。1930（昭和5）年に始まった「宮様^{みやさま}スキー大会国際競技会」は、市民参加の大会として今日まで続いています。

このように、札幌には近代以降早くからスキーやスケートが一般に普及し、ウインタースポーツは馴染み深いものとしてありま



旧大倉シャンツェ
（現：大倉山ジャンプ競技場）



旧真駒内スピードスケート競技場
（現：真駒内公園屋外競技場）に
ある聖火台

した。冬季オリンピックは、札幌で行なわれるべくして行なわれた、と言えるでしょう。

オリンピックは、札幌のまちづくりにも大きな影響を与えました。1967（昭和 42）年にまちを近代都市へ大改造する構想が立ち上がり、インフラなど都市環境整備の契機となったのです。会場を結ぶ道路として五輪通や札幌新道などが造成され、交通をスムーズにするための橋梁も架設されました。開催直前の 1971（昭和 46）年には、北海道初の高速自動車道「道央自動車道（千歳～北広島）」と「札幌自動車道（札幌～小樽）」が開通。そして地下鉄南北線（北 24 条～真駒内）の開通と同時に、冬でも快適に歩ける地下街が誕生します。地下空間の発展は、市民の冬の暮らし方やファッションを変えていきました。

競技場や関連施設、エンブレムなどのデザインには、日本を代表する建築家やデザイナーが関わりました。プレスセンター（現北海道青少年会館）は黒川紀章、旧真駒内スピードスケート競技場（現真駒内公園屋外競技場）は前川國男まへかわくに おの設計です。聖火台のデザインは柳宗理やなぎ そうりが手がけました。そして、雪の結晶が印象的な大会エンブレムは永井一正なが いかず まさによるもので、施設の外壁にも掲げられました。大会公式ポスターは、1964 年東京オリンピックのエンブレムで知られる亀倉雄策かめくら ゆうさくなどが制作。その前の招致ポスターは岩見沢市出身のデザイナー・栗谷川健一くりやが けんいちが制作しました。これらクリエイターの表現によって札幌のまちが世界へ発信され、市民は熱気とともに国際都市・札幌への変貌を実感しました。そしてオリンピック開催を機に、札幌はアジアのウインタースポーツ競技の拠点となっていったのです。

札幌市内に残されたオリンピック施設は、今も市民に親しまれています。先に挙げた建築家の作品や聖火台のほか、旧オリンピック村は真駒内団地として、美香保と月寒の屋内スケート競技場はスケートリンクを持つ体育館として利用されています。そして、大倉シャンツェを改修した大倉山ジャンプ競技場では、スキージャンプ競技の主要な国際・国内大会が開催されています。場内には「札幌オリンピックミュージアム」が併設され、ウインタースポーツや札幌オリンピックについても知ることができます。

主会場だった真駒内の通りや公園には、本郷新、佐藤忠良など著名な美術家の彫刻作品が、まちに溶け込むようにたたずんでいます。最近では、札幌オリンピックのテーマソング「虹と雪のバレーード」が一部地下鉄駅の“駅メロ”として使われ始めました。

このように、札幌オリンピックのレガシーは身近なところにあるので、実際に巡ってみるのがおすすめです。きっと、札幌のウインタースポーツの歴史とともに、まちに新たな文化を作り出したオリンピックの記憶を感じることができるでしょう。



真駒内の彫刻群（五輪大橋）



旧美香保屋内スケート競技場（現：美香保体育館）にある大会エンブレム



札幌オリンピックミュージアム内の展示